

「未来への誇り」を糧に

自らを主体として考える年に



○イラスト
好地 莊
菊池未来子 生活指導員

岩手県社会福祉事業団

理事長 水野 和彦

も言いうるのではないのでしょうか。

2 『知』と『情』両面からの説明力

当法人として『意識を持った情報発信』を積極的に行っていくことが大切であります。利用者や地域住民の皆さんに、地域で行っていることはもちろんのこと、事業団及び各施設としての考えを、理解・納得をいただくように伝えるべき、説明責任があります。それこそが(地域との)信頼関係の構築に、利用者や地域住民の皆さんとの一体感の醸成に繋がっていくこととなります。

私たち事業団がこれまで担ってきた、これからも担っていくであろう、地域福祉の要としての立ち位置を当たり前のこととしてではなく、私たち職員が意識的に確保していくためには、『知』と『情』両面からの説明力を身に付けて、さらに実践していかなければならないと思えます。

3 福祉サービスの向上と経営力は両輪

老朽化した「みたけの園・みたけ学園」の改築検討が進んでおり、「療育センター」も矢巾の岩手医科大学の隣地への整備が始まります。福祉サービスの向上と併せて、財務基盤の安定は重要であり、より迅速・詳細な経営分析の体制を整え、28年度からの自立(自律)経営の

確立に向けて、現実・實際を正確に把握した上で、これをベースに、「経営の視点を加えた：サービス改革・改善」を進めていくことは、私達皆の総合力の発揮如何にかかっております。

4 誇りと自信を確認しよう！

職員研修講話を通じて、商工観光業や建設、農林水産業、医療や教育等々、「福祉」は多様な仕事の中の一部であるとともに、『人の生活の幹』の部分、生活としての基礎である、と述べてきました。社会福祉法人の制度改革が検討され、存在意義が問われている中、これまで岩手の福祉を支えてきたことを自負し、『事業団としての誇りと自信を再認識』することが、今こそ大切ではないかと思えます。今年も、内外の環境の様々な変化が生じると思いますが、福祉事業を通じ培ってきた先輩達の継らせた『実』をしつかりと『次の世代への種子として改良』を重ね、利用者や職員の皆さん、そして地域の方々の、『未来への誇りとなりうる事業団』として、限らない地域福祉の向上を目指していきたいと思えます。この一年、それぞれの悩みを糧にしながら、次に繋がる、共に歩む一年にしていきましよう。

1 私達、社会福祉事業団とは？

今年、当事業団は、中長期経営基本計画の中間見直しの年であります。私達自身が常に、自己で判断し、責任と自由な発想で実践する力を持ち進んでいく『元年』ともいえるべき年であります。近年、社会福祉法人改革が叫ばれ、地域社会への貢献や法人としての透明性確保いわば説明責任等が検討されてきております。

これら検討の内容は、今般の制度改革の議論の有無に関わらず行ってきたことでもあります。今地域が「社会福祉事業団に何を求めているのか、事業団として地域ニーズに沿って何ができるのか」、改めて確認するチャンス。『事業団だから当たり前前ということではない、事業団として立つべき位置、立てる位置』を、私達自身が皆で思い起こすタイミングと